

書評

島村幸忠

『頼山陽と煎茶』

——近世後期の文人の趣味とその精神性に関する試論』

笠間書院、2022 年

旦部 辰徳

勤皇の志士たちを鼓舞したとされる大著『日本外史』の作者として歴史に名高い儒学者・頼山陽が、書画・煎茶にも造詣の深い「文人」であったことはつとに知られている。一方で、頼山陽自身が、それら自らの趣味について「余技」と記したこともあり、「文人」としての山陽に対する学術的研究の層は、それほど厚みを増してこなかったと思われる。その意味で、本書は、外形的には、そうした間隙を埋めうる研究書の一つであるといえる。しかし、本書の目論見を紐解けば、頼山陽研究の一層の充実に資するという以上に、文化文政期の煎茶文化研究の橋頭保を築くことに主眼が置かれていることが理解される。まず、この点に留意して、本書の志向を解きほぐしてから、具体的な内容の検討に入りたい。

本書に臨む前提として、江戸期の文化において、煎茶を喫する、という営為が単なる趣味以上の関心の対象であったことを押さえておかなければならない。本書序章の記述を参考に、簡潔に、江戸期文化における煎茶の位置づけについてまとめたい。江戸時代前期に明の禅僧によってもたらされた文人趣味としての煎茶は、高遊外壳茶翁という人物により、世に広められてゆく。翁が京都にて構えた茶舗に集ったものの中に池大雅や伊藤若冲など文人画家の大家らの名が認められるとおり、煎茶は当時の諸芸に秀でた知識人らの注目の的であった。当時文化的先進地であった中国の文物に積極的に学んだ進取の気風を持つ彼ら文人らの眼に、著しく形式化・形骸化・遊芸化された従来の茶道（茶の湯）に対し、茶室や道具に縛られず礼法に捉われない自由度の高いふるまいを旨とする煎茶の存在が清新に映ったことは、想像に難くない。上田秋成らによって、煎茶専門書の出版を通じ、茶の湯に対する煎茶の独自性の定位が試みられ、また文人間の交流の場——詩会や書画会等の催し等——で煎茶が喫された記録が認められるようになるなど、江戸の文人社会の中で煎茶の存在は確たる位置を占めるようになる。殊に、文人文化の成熟期とされる文化文政期においては、煎茶に深い造詣を持つ文人が日本各地に居並ぶ程となった。

江戸期の文化において一つの流行として、鮮やかな浮上を示していた煎茶。しかしながら、煎茶をめぐる研究は「圧倒的に蓄積を有していない」（20 頁）と、著者は嘆ずる。併せて、近年の研究状況として、売茶翁や近代以降の煎茶文化研究には一定のまと

まった成果が上梓されているが、文人文化の最盛期である文化文政期における研究成果はいまだ十分でないことが指摘されている。本書の最大の狙いは、文化文政期に名を馳せた一文人である頼山陽に焦点を当て、氏が残した著作物や漢詩、山水画、さらには煎茶室に至るまでを分析し、文人の生の営みのなかで煎茶がいかなる意義を有していたかを詳らかにすることで、「文化文政期の煎茶文化研究の再始動」(183頁)を企図したことにある。あえて、一人の人物を深掘する人物研究のアプローチが採用されたのは、往時の文人が如何ほどまで深く煎茶と結ばれていたかについて細やかに描き出すことが目論まれていた故と察せられる。それは同時に、江戸期の文化研究における、煎茶文化研究の重要性を押し上げることにもつながりうる。

それでは、何故、「文化文政期の煎茶文化研究の再始動」の一步目が、頼山陽である必要があるのか。その答えは、本書において必ずしも明示的ではないが、一つに、山陽が「煎茶文化を支えた文人の代表者」(22頁)とまでに評される煎茶巧者であり、多数、煎茶に関する作品や書簡を残しているためだ。それゆえ、本書は、それら詩文の分析を中心に展開される。以下に、本書の内容を要約的に概観したい。

第一章「歴史のなかの茶の湯」では、山陽による茶の湯批判が検討されている。太宰春台や上田秋成を引き、近世中後期に展開された茶の湯批判の基調を把えううえで、山陽の茶の湯批判の特徴を描出する。春台の随筆『独語』や秋成晩年の煎茶書『清風瑣言』では、茶の湯における礼法や茶具の扱いが形式に拘泥していることを難じたうえで、煎茶に新たな流儀創出の機運や、清貧にも通じる「清」なる価値を認める本質論が提示されていることが確認される。山陽の基本的な煎茶観の志向については、知己のものに宛てられた書簡や著作の跋文、漢詩の読解分析をもとに検討される。同郷の知人橋本竹下への書簡において、茶の湯を邪説に比して痛烈な批判を行ったうえで、茶の湯の茶の味を大いに凌ぐ煎茶の「上界清福」な絶味が称揚されていることが跡付けられる。さらに、「題續茶經後」という跋文において、山陽が、煎茶を絶句に抹茶を古詩に喩え、前者の、味の優位と茶を淹れる際に求められる技量の高度さ——「機」すなわち茶の味を最も巧く引き出す好機を掴むセンスが煎茶には必須であること——を謳っていることが指摘される。出色なのは、ここでの「機」なる一字が、山陽の政治理論書『通義』にて重視される「機」なる概念と通じていることが明らかにされたことだ。天下を統治するために情勢の変化の兆しとしての「機」を把握して適切な判断を下す「有識の士」「深識の士」の姿が、茶を煎じてその滋味が最大化される一瞬間の到来を過たず掴み取る文士の姿と、パラレルに描かれていることを剔抉した筆者の分析の巧緻な手つきには、目が覚められるものがある。山陽の煎茶観に対する同氏の政治思想の投影をさらに証すために、続いて、長古(句数の長い詩)「煎茶歌」の内容が閲される。そこでは、茶を沸かす情景のリアリスティックな細密描写が、次第に、過去の為政者らが茶を喫している情景の想像的な描写へと

転じ、大規模な茶会でもって配下の武人らを従順させた為政者の手練手管の妙が評されるにあたり、驕奢という主題が浮上する過程が示される。こうした山陽の身振りのなかに、『通義』の中に山陽が編みこんだ、奢侈に対する批判の系との連続性が確認される。

山陽の煎茶観をさらに克明に描くべく、つづく第二章「物外に心を遊ばせる」では、山陽が実際に臨んだ茶席に因んでものされた「桐陰茶寮記」という記文の読み込みが進められる。山陽の同郷の友人である小野桐陰の茶寮の描写と、桐陰と山陽の茶席を介した交歓の様相が詳述される同記文には、桐陰の茶寮を象徴する「桐」というおおよそ茶室を飾るに似つかわしくない落葉樹が自由な煎茶のメタファーとして機能していること、さらに、茶の湯に限らず煎茶においても耽溺は「罪」であると戒める調子の存することが明かされる。そのうえで、同記文の核心が「心を物外に遊ばせる」という記述にあり、そこに『莊子』に示された「遊」、すなわち「とらわれない自由な心」を煎茶の精神としても顕揚する、山陽の煎茶観の要所が現れている、と論ぜられる。著者は、本書の冒頭で、ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』の一節を引いていることから察せられるように、この「遊」ないし「游」という一字に特別な配慮を払っている。それは山陽の煎茶観の肝をなすものであると同時に、同氏の漢詩制作の心得でもある、いわば山陽における芸道一般に対する基本的態度を示すものであるからだ。故に、「游（遊）」の語源学的考察も抜き行われている。かつて中国古来の芸術理論に登場し、日本における煎茶家の始祖ともいえる売茶翁も自身の詠詩においてたびたび用いてきた「遊」は、翁においては現生を遊離し仙境に達するという超俗性を伴うものであったが、山陽においては仙境への憧憬が払拭され、ある一つのものから別のもののイメージを引き出す精神のメタフォリカルな働きへの注視が際立つことが示される。この点は、江戸期に入ってから文化全般に拡大した「見立て」というレトリックのダイナミズムとの連関を感じさせるものでもあり、評者にとって、大変興味深く思われる。

第三章「声を聴き、声を詠む」における漢詩作品の分析においても、山陽が好んだレトリックの特性に焦点が当てられている。まず、江戸期後期の漢詩が、十八世紀半ばを境にして、盛唐詩や明詩を範に取り修辞や作詩法を重視する「古文辞格調派」から、宋詩の影響により反擬古や反格調の傾向を著しくし、実生活に取材し写実を重視する「清新性霊派」へと移行していた背景を押さえ、山陽の詩作も基本的にそうした流れに掉さすものであったとする。それゆえ、日常的に煎茶を嗜んだ山陽にとって、その詩想の少なからぬ割合を、煎茶が占めることは想像に難くない。本章の大部は、山陽がいかに煎茶を詩に詠み込んだかを、仔細に検討することに割かれている。山陽の詠詩が数多、「声」、すなわち日常生活における種々の音を詩材とする傾向性を持つことを明らかにし、煎茶を材に採った漢詩においても茶の「声」のモチーフが、実に多様なメタファーを伴いながら、現じてくることが確認される。例えば、七言絶句「茶

声」では茶鼎が鳴る音は琴や笙の音色に、題画詩「題畫」ではミミズの鳴声に、七言絶句「夜坐」では蟬鳴に、長古「煎茶歌」では蚕が桑を食む音や管弦楽の激しい演奏に比される。無論、かような文彩は山陽の完全な独創ではなく、それぞれにおいて中国における漢詩の表現史を汲むものである。しかし、それでも、同時期の文人により詠まれた煎茶を材に採った詩作品と対照すれば、山陽における「茶声」の前景化は特異なものだ、と指摘し、本章は結ばれる。評者はここで、漢文脈と日本の近代文学の形成との関係性を跡付けた良著である齋藤希史『漢文脈の近代——清末＝明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005.2）において、「和習」として時に非難されることのある山陽の『日本外史』の文体が、朗誦して耳に入りやすいリズム中心としての漢文体として把握されており、漢文訓読体へと漢文が通俗化してゆく過程を経て普通文という文体が誕生する言語的な近代の到来の前駆として評価されていたことを思い起した。「音」への山陽の拘りは、レトリックのみならず、漢文体の再構成の位相にまで及ぶ広がりを持っていたのかもしれない。

以上までの章が、山陽の詠詩という表現行為と煎茶との強い紐帯を明かすことに力点が置かれていたとすれば、以降の章は、煎茶を介した交遊・そうした交遊の場を立ち上げる装置としての煎茶室、というように、山陽の生活の現実の相における煎茶の意義に迫るべく企図されている。第四章「友とともに、酒とともに」では、山陽と他の文人との交友の諸相を詩文の読み解きから詳らかにし、煎茶を喫することが酒飲と対の行為として捉えられ前者の「醒」なる作用に関心が注がれていたことが示された。第五章「風景のなかの歴史」では、山陽が鴨川河畔に結んだ煎茶室「山紫水明処」の特性を分析することで、山陽の風景観に迫った。山紫水明処から眺望される東山連峰が、友のような親しさを持つ対象として、また、幾多の治乱の歴史が積層した、山陽の動態的な歴史観を象るものとしても山陽に眼差されていたことが明らかにされた。また、本書には補論が二つ付されており、山陽と同時代の文人が有していた煎茶観と山陽の作画に対する分析によって、山陽における煎茶の意義をさらに立体化すべく試みられている。

「文化文政期の煎茶文化研究の再始動」を画した本書は、その端緒をひらくに相応しく、詩文から書画、さらには建築空間に至るまで、頼山陽という文化文政期に躍動した一人の文人が如何に煎茶とともに生きたのか、全方位的に検証するスケールの大きな研究書として結実した。その成果は、煎茶文化研究の範囲のみに留まらない、と評者は考える。日本近現代文学を専攻した評者にとって、本書は、明治以降の近代文学の素地の一つとなった近世後期の漢文脈の動静の一筋を具に浮かび上がらせる表現史的な研究書としても、大いに楽しめるものであったことをここに断っておきたい。本書が築いた礎は、近世文学ないし近代文学研究にも必ずや資するであろう。そのような広大な射程を、本書は有している。